

紅地唐花入り斜格子文様縹珍打敷

一三〇・七×一三〇・七

明時代

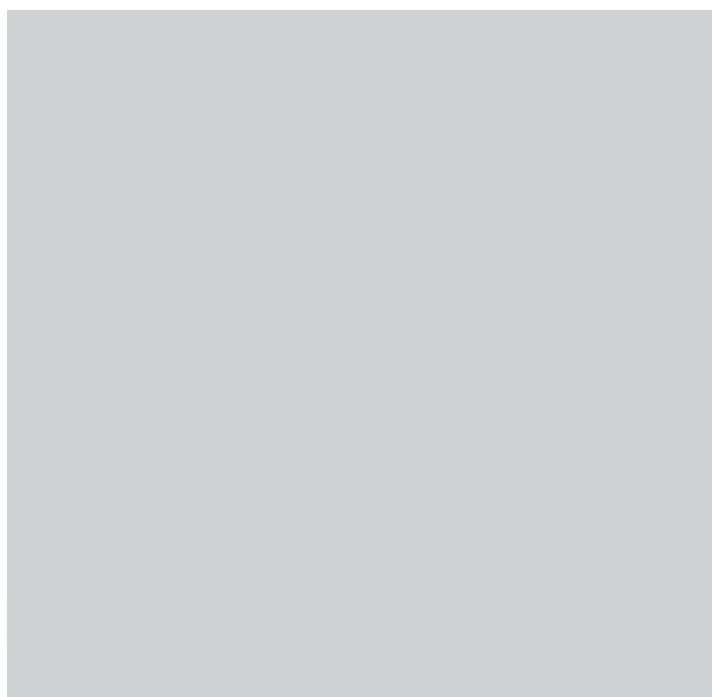
京都 真珠庵蔵

京、紫野大徳寺塔頭、真珠庵には十二種の打敷が伝えられている。^{注1} それらの五種には裏裂に、年記をともなつた寄進銘などの墨書が見られ、いずれも作期をほぼ推定することのできる染織資料としてきわめて貴重な意義を有するものである。その内の二例についてはすでに紹介したが、^{注2}ここにいま一例を加えたい。それは十二種の内で最も古い年記を有するものである。しかし後述のようにこの墨書は後に書かれた懸念もあり、必ずしも年記どおりの作期を推定することはできないかも知れない。しかし一般的に考えられているこの種裂地の作期と、年記がほぼ一致すると考えられるし、ここではむしろ後世の墨書であるにしても、作期のうかがえる資料として積極的にとりあげてみたい。

紅地唐花入り斜格子文様縹珍(図1)

袷仕立て表地は紅地唐花入り斜格子文様縹珍。^{注3}裏地は紅平絹の数枚をはぎ合したもので、毛抜き合せとし、縁に添って大小針目の紅糸で仕付け風の飾縫をほどこす。

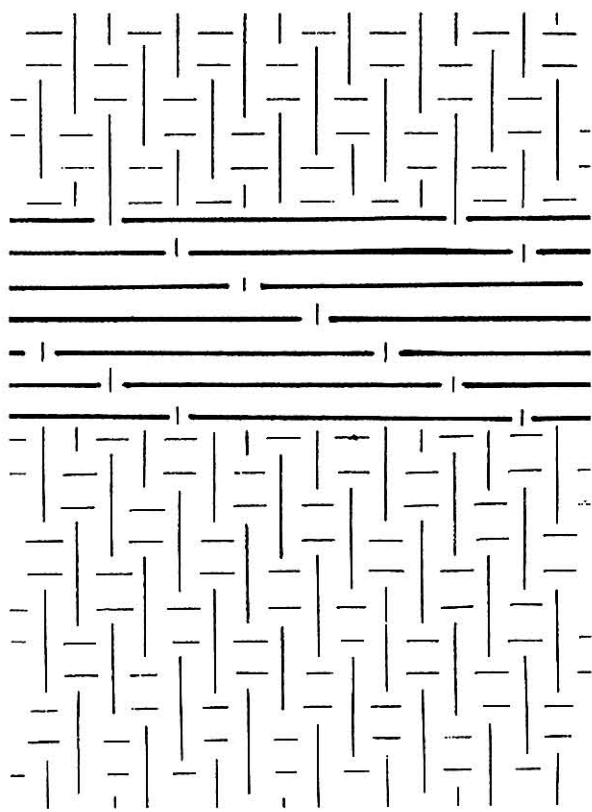
表地は、一幅約六四・四纏を二枚を並べてはぎ合せ、法量約一三〇・七纏四方(挿図1)。紅地の全体に蒔葱の格子文様を斜に割りつけ、



挿図1 紅地唐花入り斜格子文様縹珍打敷 真珠庵蔵

各区の内に直径約四・五×五・四纏(大小区々である)のやや扁平な円花文をそれぞれ一窠ずつおさめる。また格子の交点には小花文を各々一箇配し、その中央には扁平な雲珠を置く。さらに雲珠の左右中ほどに小円文を各々一箇あらわしている。格子の内の円花文は、中心部に八曜を据え、屈輪文風の花弁を六枚、中心円にそって、あたかも六弁花のように周らし、さらに各弁の間に小弁をのぞかせていわゆる八重の全花形とする。

経糸は紅染で丸味のある美しい糸質をしめし、Z撚りがかかっている。地緯は同じく紅染で、ほぼ無撚りのものを二本引きそろえて一越とする。ただし部分的に一本一越の場所が見られる。これは特



挿図2 紅地唐花入り斜格子文様縞珍組織要領図

に絵緯が織り込まれる円花文様の部分に見られ、絵緯の加わること
 によって密度が極端に高くなること、すなわち円花文様が縦に間
 びすることを防ぐ意味であろう。絵緯は無撚で柔らかさを感じさせ
 るもので、白、紺、萌葱、蘇芳、黄などが見られ、横に並んだ円花
 の色を揃えて段替り調子の配色とする。したがってそれに並ぶ小花
 文も同色となるが、段替りの色順は任意である。各花は必ず萌葱
 と黄の縁くくりとするとところから花の部分では、絵緯は杼三挺、雲
 珠の部分では杼二挺で処理しそれを繰り返す。組織にはきわめて
 特色があり、地組織は二越沈み、三越浮くのを繰り返して右上へ
 二飛する経変化五枚縞子。絵緯は全越しに織り入れて地揃みで押え、
 半経で五枚綾、S流れて揃んでいる(挿図2)。密度は、経は一纏の内

に約七〇本。緯は約一五越。ただし二本引き揃えの部分では約一三
 越に減少する。ハツリは三本かと思られる。文丈は約一二・〇纏、
 窠間幅は一一・七纏。

きわめて美しく堅固な張りのある糸の様相、整った成織、そして
 屈輪文を円形に配した円花文をはじめとする意匠の特色などから、
 明より舶載の裂地が用いられたものと考えられる。

墨書

先にも触れたようにこの打敷裏裂には左のような墨書(図3)があ
 る。

真珠禅菴公用

文亀元年辛酉年十二月

祖溪宗臨居士寄附

裏地は紅平絹で、すでに褪色がすすんで古格をうかがわせるが、
 その風合いは江戸時代の特色をしめすようである。さらに墨書もそ
 の年記の時期と考えることはできないことが指摘された。^{注4}ところで、
 寄附者とする祖溪宗臨は真珠庵のみならず、大徳寺にとつて注目さ
 れる大檀越である。その寄進になる施物も数多くあつて当然で、こ
 の舶載裂も墨書のように宗臨寄進であると考えられる。周知ながら
 祖溪宗臨についてあらましを述べておきたい。^{注5}

宗臨は泉州堺の貿易商人で、俗名宇和屋四郎左衛門、絶大な一休
 の帰依者であった。宗臨は同業の淡路屋寿源を語らって、共に私財

を投じて大徳寺の仏殿、方丈、庫裡などを再建した。その時に自らの貿易船の帆柱を庫裡の梁に用いた。それは当時の俗信に、帆柱を梁に用いると、家運の繁栄が得られると考えたことを反映したものである。宗臨は一休の用にあてて住庵の建築を望んだが、一休は固く辞退し、代つて大徳寺三世の言外宗忠を開祖として如意庵を、四世華叟宗曇を開基とする大用庵の再建を依頼したという。やがて一休没後十年の後、ようやく延徳三年（一四九二）、真珠庵が営まれた。

このように一休と宗臨との密接な関係が知られるのである。ところでこの墨書に見る「文亀元年十二月」（一五〇一年）はどのような意味を持つのであろうか。1まずこの年記は宗臨の忌日、同年十二月二十日^{注6}を指すのであろう。2あるいは二十日でなくとも生前の十二月中に寄進されたこともありうる。3裏地が破損し、江戸時代に取り替えられる時に、古裏裂に書かれた墨書がそのまま写された。43のように考えるのは、寄進者名は伝承によつて書くことは不可能ではないが、加えるにあえて文亀の年記を書き入れるには確実な根拠がなくはならないであろう。また必ずしも年記が要るわけでもなく、したがって書き入れにあつて過去帳を参照するほどの手間が、はたしてとられたであろうか。以上のような考えから、古裏裂にはすでに墨書があつてそれがここに写されたと考えるのである。したがつてこの墨書が後世の筆になるものであるにしても、この打敷裂にとつて重要な意味をもつものであると強調したい。すなわちこの裂地の作期について、その下限を推定する手がかりを与えたいえるのである。

蜀江文様

かねて、この種の大小花文を互の目に配し、さらに二種の花文を縦横あるいは斜に繋いで構成した割付文様に注目しているのであるが、この打敷裂もまたその一例と考えてよいであろう。それぞれにかなりの変化がみとめられるもののそれらを総称して蜀江文様とよんでいる。名称の来由はとにかくとして、その古例は山形県黒川村のいわゆる黒川能の上座大夫家に伝えられている翁狩衣^{注七}で、二種の花文と花入り方形文を縦横斜に繋いだ古格な蜀江文様が見られる。その複雑な構成に八宝をさえ配した重厚さに比べると、この打敷の文様はかなり整理されているのに気づくのである。しかし、蜀江文様の原点を仏殿の格天井と考える側に立てば、これはむしろ格天井そのものにきわめて近い表現であるといわなければならない。

木造建築である仏殿の構造体をそのままに写した古例は、周知のように鞞石窟の天井浮彫（挿図3）などに見られる。格間には万物生成の根元であり、天界の中心である大蓮華から生じた蓮華があらわされ、さらに蓮華から化生する飛天が刻まれている。このように蓮華は仏を生み、また多くの蓮華を生成し、それはまた諸物を化生せしめる存在でもある。この思想をもとにして、仏殿の天井に天界を浮遊するもののように数多くの蓮華があらわされたのである。また興味ある点は、中国の石窟に見た格天井の文様が我国に伝えられると、格間をはみ出るように旺盛な姿を見せた蓮華が、例えば法隆寺金堂天井のように、太い格子の各区におだやかにおさまることである。ところでこの打敷文様は国や時代を異にするもののその法隆寺金堂の格天井（挿図4）に似て厳正な斜格子の内に大円花がほどよくおさまられた意匠を見せる。現状ではこの円花は前述のように円形をかこむ屈輪文の連続に変化しているが、本来は蓮華の全花形で

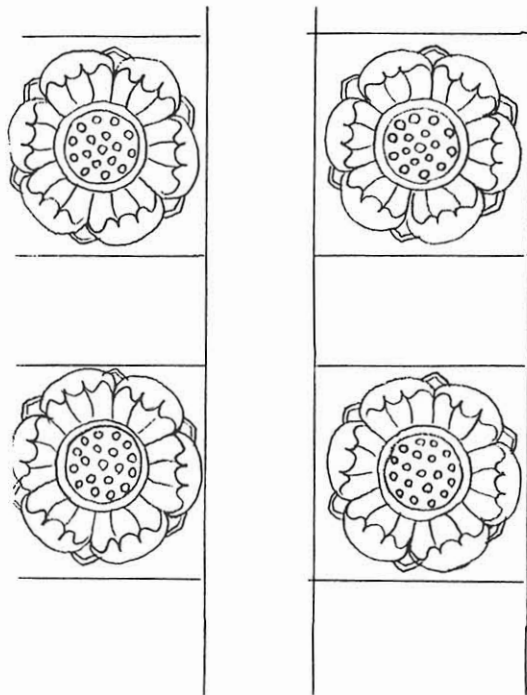
あることは確かで、この意匠がまさしく格天井を写したものと推察されるのである、また格子の交点部分には、辻飾りとして配された小蓮華にあたる小花文が各々あらわされている。さらに格子の各中



挿図3 鞆県石窟天井浮彫

間には雲文が置かれていたが、これは天井意匠には見出せないところである。おそらくこれにも意味がある筈で、すなわちインドの仏教思想が中国化する時に、中国在来の思想と結びつく。例えば『淮南子』の天文訓に説かれる「氣」の考えで、氣もまた蓮華と同様に万物を生み出す根元とされ、目には見えないが、世界を創りつつあるとする。この文様では右のような氣の觀念を格子の中ほどにあらわした扁平な雲頭文で表現していると考え^{注8}てはいかであろう。

蜀江文様は多彩な変化をしめし、江戸時代末期には井伊家伝来の翁狩衣(挿図5)に見るような変貌をとげるのである。井伊家狩衣の文様にいたる間に、その基本的な構成はやがて定形を完成することとなる。すなわち八角形と四角形を互の目に繋いだ割りつけ文様(挿図6)で、その内に花菱形や牡丹、唐草など多様な変化をしめす形象をおさめるのである。そのような八角形と四角形を繋ぐ構成は、例

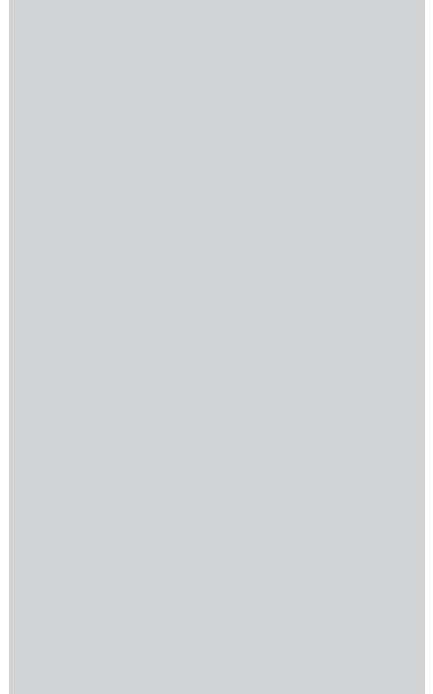


挿図4 法隆寺金堂格天井蓮華文様要領図



挿図5 茶地斜め竹格子鳳凰丸桐菊寿字文様錦狩衣（部分） 井伊美術館蔵

えばこの打敷文様の場合でいえば、次第に辻飾り的な花文が大きくなって、ついに方形で囲むこととなり、一方、格子は上下の部分はその方形で切られることとなって八角形が形成され、一般に蜀江文様として知られる新しい角繋ぎ文様が生み出されることとなるのであろう。



挿図6 蜀江文様金欄法被

このようにこの打敷はいろいろの問題をはらんでいてまことに興味深い。ところが、裏裂に見る墨書は後世のもので第一等の資料とはいえないかも知れないが、上述のようにあながち無視することはできないと考えられる。また文亀銘は記銘のある染織資料の中でも、他に類例を知らず染織史上注目されるし、またこの裂が明から舶載された下限をうかがわせるのである。

（切畑健）

〈注〉

- 1 その全貌一覧を『MUSEUM』376号にしめた。
- 2 注一参照。二例は白紅綸子地夕顔龍胆藤柳文様絞繡箔裂打敷（元和六年）と蘇芳綸子地葡萄網干円文様絞箔裂打敷（寛永十六年）である。
- 3 特色のある組織の繡珍で京都国立博物館蔵前田家伝来の名物裂中にも類品が見られる（『京都国立博物館蔵名物裂』下16変り蜀江文様黄緞）。それは地緯に木綿糸を用いた典型的な黄緞であるが、これは地緯に絹糸を用い、経もしっかりした通例の用糸であり、絵緯の揃みが綾である点が異なる。
- 4 下坂守氏（京都国立博物館美術室、書跡担当技官）の指摘による。
- 5 祖溪宗臨については源豊宗氏の『大徳寺』（昭和三十三年 朝日新聞社）

による。

6 真珠庵の過去帳に

「祖溪宗臨庵主大悲咒 十二月
每月有供

堺住俗名宇和屋四郎左衛門本山法

堂方丈総門築地如意菴建立

大担越也

文亀元辛酉年十二月廿日没

とある。

7 この狩衣については

拙稿「『翁』装束の基本思想―黒川能の蜀江・光狩衣を中心に―」（京都

国立博物館『古面』参照。

8 井上氏の論文 注7拙稿参照。

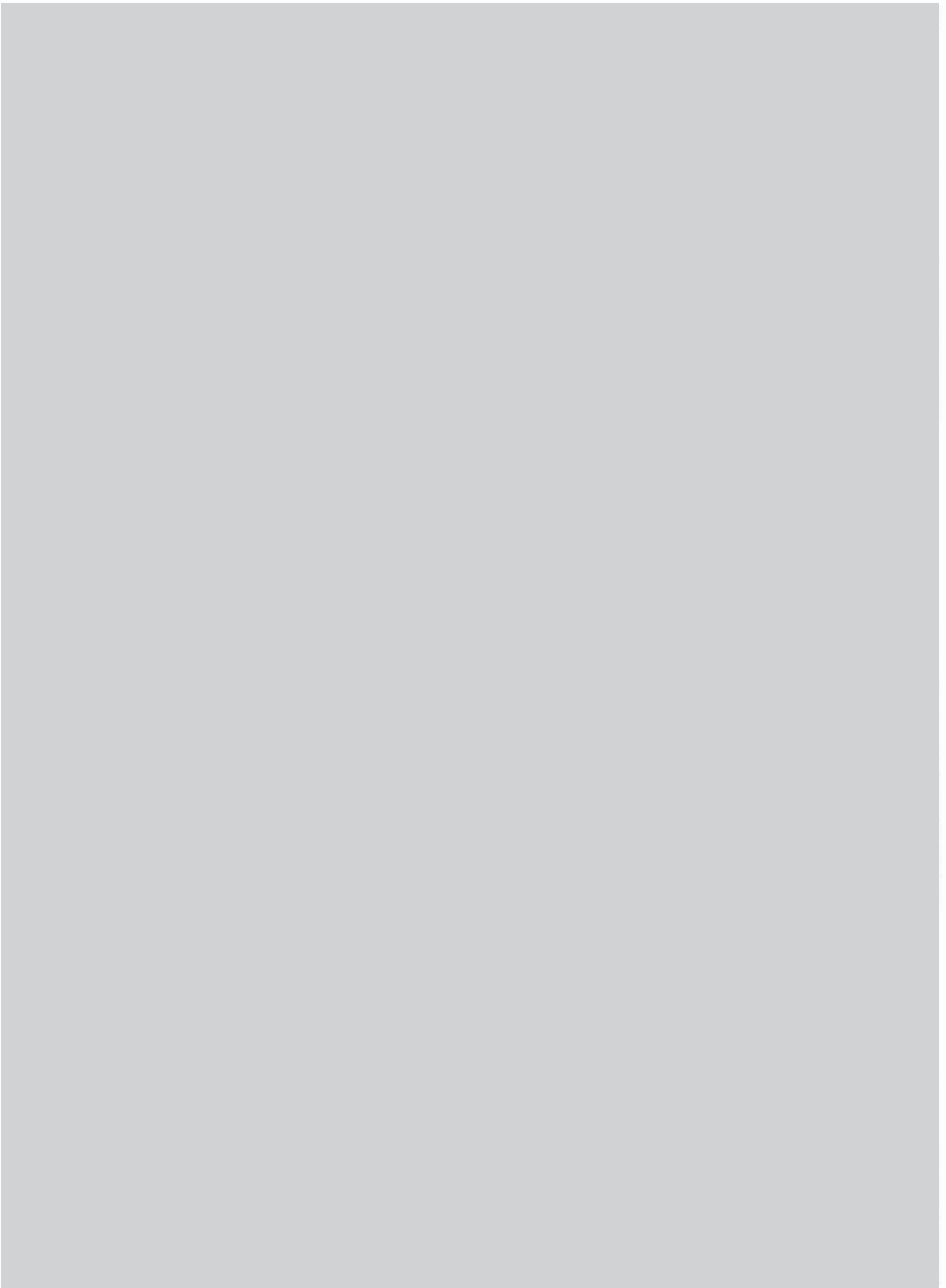


図1 紅地唐花入り斜格子文様錦打敷(部分)原寸 真珠庵藏

図2 紅地唐花入り斜格子文様縹珍拡大図(4倍) 真珠庵蔵

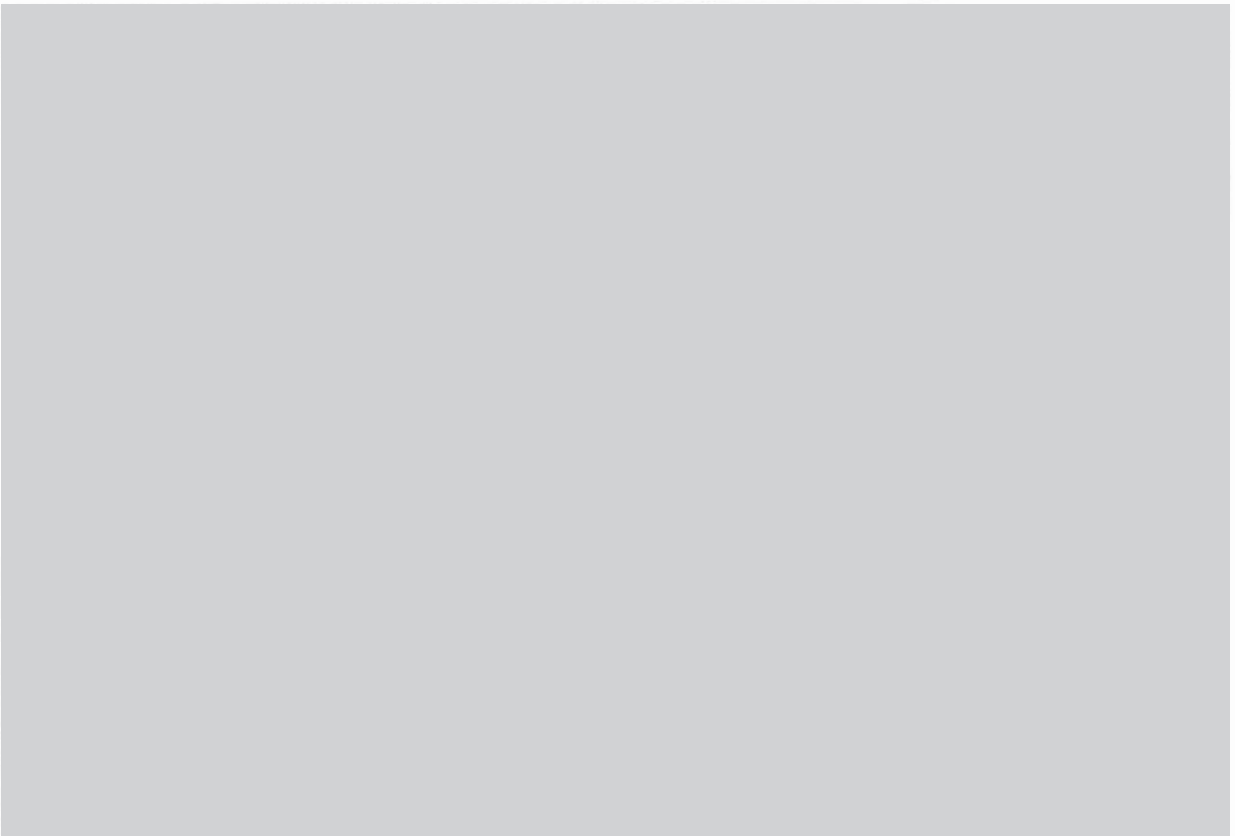


図3 紅地唐花入り斜格子文様縹珍打敷裏面墨書 真珠庵蔵

